

目論見通り愛に溺れて？

『花のような美しさ、なんて誇張だと思つてた。君に出会うまではね』

……え。なにこれ。

午後十時二十五分。私——水原瑠璃はパソコンのキーボードに貼りつけられた正方形の付箋を手に取り、そこに連なつている文字を凝視する。

怪訝に思い辺りを見回すも、夜のオフィスに人の気配はない。当然だ。今夜残業しているのは私だけなんだから。

パッケージデザインや本の装丁から空間まで、幅広いデザイン制作を手掛けるこの事務所に入社して一か月と少し。

ここで働くことを目標にしていた私が、事務所のほうから引き抜きの話をもたらしたのは身に余る光栄であり、幸運だった。

なんせ新卒を取らず、ごくたまに中途採用情報が出ても該当者なしなんてことが珍しくない狭き門だ。自分の力を認めてもらえた気がして、本当に嬉しかった。

ここで働きだしてからというもののプライベートは削られていく一方だが、一人前のデザイナーを

目指して学び、刺激的な時間を過ごす毎日は充実している。

そしてこの場合の“刺激的な時間”とは、仕事において感性を刺激されるという意味合いである。——こんな背筋に悪寒が走るような刺激は全くもっていらぬんですけど。指先に引つ掛けていたコンビニの袋を自分のデスクに置く。がさ、という音がなんだかやけに響いた。

今夜の残業中、私がデスクを離れていたのは、ほんの十五分ほどだ。休憩がてら、近くのコンビニへ買い物に出掛けていた間だけ。そして戻つてすぐに発見したこの付箋——つまり、私がデスクを離れていた十五分の間に、誰かがこれを私のパソコンに貼りつけたのだらう。

一体誰が、なんの目的でこんなものを？  
筆跡を見ても、ぱつと思いつかない。

この事務所では社員同士で連絡を取り合う場合、チャットアプリやメールを使用することがほとんどだ。

誰かのデスクに手書きのメモを残すことが全くないわけではないが、小さな用件も基本的にはパソコン上でやり取りをしている。

特に、新参者の私はまだ社員の書いた文字を目にしたことなどほぼない。

「花のような美しさって……」

手の中の黄色い付箋にもう一度目を走らせる。本当になんなんだ、これは。そもそも私を花のように美しいと表現する時点でおかしい。ぱつと見としては褒められている文面ではあるが、むしろ嫌がらせではないだろうかと勘繰ってしまう。正直気味が悪いし、なぜやいな気持ちになった。

ぎゅつと眉を擡める。

ツンとした鼻もあがっている目尻も、冷たそうとかキツそうとかクールとか言われてしまいがちなのは、二十六年もこの顔で生きていれば自分が一番よくわかっていなのだ。

しかも本来の自分はクールとはほど遠く——もつと言えればかなり子供っぽい性格だと自覚があるので、そんな風に形容されるたび微妙な気持ちになる。

ただそれに関しては、二十六にもなつて人見知りを改善できず、相手に気をつかせてしまう自分に問題があるのだけだ。

とにかく、花のような、なんてなんだか温かみを感じる表現、私には似合わない。

「……あつ、締め切り！」

ふいに時計が目に入り、慌ててパソコン画面を覗き込む。

そうだ、こんなことに気を取られている場合じゃない。なんとしても今夜中に仕上げなくちゃならない案件があるんだから。

黄色い付箋をデスクの引き出しに放り込む。

事務所のゴミ箱に捨てて誰かに見つかったら気まずいから、家に持って帰って処分しよう、そう思ったからだ。

集中力が高いのか、ひとつのことしか考えられない単純な作りの頭なのかは自分でもよくわからないけれど、一度パソコンに向かえば、頭の中はすぐに仕事のこと一杯になる。

そうして、ようやく締め切り間近の仕事を終えたとき。満足のいく仕上がりに私は喜色満面だった。誰もいないのをいいことに、事務所内をスキップで移動したほどだ。

それから仮眠室のベッドに入り、朝まで少し眠ろうと思ったものの、脳が興奮していてなかなか寝つけず。

近くに置いていたバッグをいそいそと引き寄せ、大好きな少女漫画を取り出した。

締め切り間際は事務所に泊まることも寝つけないこともしよっちゅうなので、持ち歩いているのだ。ただし、死ぬほどにやにやにしてしまうので知り合いの前では絶対に読まない決めてい。事務所内なら仮眠室限定だ。

十五年近く前に刊行されたこの漫画は、単巻で完結する高校生同士の恋愛物語。

何度読み返しても飽きることがない。見ずに描き起こせと言われたら多分できる。

それくらい読み込んでいる大好きな漫画だ。

物語の始まりは高校の入学式。とある男の子に一目惚れをしたヒロインが、その想いと携帯電話のメールアドレスを記した手紙を彼の下駄箱に忍ばせる。

彼からのメールは届かず、けれど何日かしてヒロインの下駄箱に手紙が入っている。彼が、携帯を持っていないからとわざわざ手紙で返事をくれたのだ。

そこから手紙のやり取りが始まるが、実はヒロインは手紙を届ける下駄箱を間違えていた。その

下駄箱を使っているのはちよつとやんちゃな、ヤンキーっぽい男の子だ。間違いに気づいたヒロインは、手紙をやり取りしている彼が気になり始め――

……ああだめだ。何回読んでもだめだ。

控え目に言っても心拍数爆上がりで死ぬほどにやける。

ヒロインもヒーローも、かわいくてかわいくて好きすぎる。

仕事が仕上がったのとは別の意味で脳が大興奮、大騒ぎである。

そして、ふと思う。

あの不可思議な黄色の付箋も、一応は「手紙」に分類されるものなのかな、と。

「……悪戯にしても、どうせ届くなら漫画の中の手紙みたいなのがよかったなあ」

ああいう歯の浮くような文面じゃなく、この漫画のヒロインやヒーローが書くような、わかりやすくかわいさ溢れる手紙が届いたらよかったのに。なんて、勝手だろうか。

結局、その夜は睡眠をとることなく漫画を読み進めた。

迎えた締め切りの日の朝、出勤してきた社長に仕上がりをチェックしてもらおうと、なんとかゴサインが出た。安堵感と達成感に包まれ肩の力が抜ける。

そしてその日の夕方、帰り支度をする頃には――引き出しの奥に放り込んだ黄色の付箋のことなど、綺麗さっぱり忘れてしまっていた。

付箋ふせんの存在を思い出したのはそれから二週間後のことだった。

社長が突然「今日はノー残業デーにする！ 全員六時退社だ！」と言い出した金曜日。初めて自分の職場で耳にしたノー残業デーという響きに、私は驚きながら帰り支度じたくをした。

時間との戦いになることが多いデザイン業界で、こういった取り組みをしている事務所があるとは。

不思議に思つて隣のデスクの椎名しいなさんをちらりと見やる。

ほとんど話したことはないが、よくあることなのかと尋ねてみてもいいだろうか。大丈夫かな。

人見知りが発動し、顔が強張こわばっているのを自覚しながら、声をかけてみる。

「ああ、ノー残業デー？ 珍しいことじゃないよ」

「あ、そうなんですわね」

ただし、社長がノー残業デーと言い出した翌週には必ず忙しくなるといふジンクスがあるそうで、「抱えている仕事があったら早めに片づけちゃったほうがいいよ」と遠い目でアドバイスをくださった。

「椎名。これからいつもの店行くけど、どうする？」

椎名さんが席を立ったタイミングで、向かいの席の男性社員が彼女に声をかける。

「行く行く」

「じゃあ店まで椎名も一緒に……、あつ、み、水原さんもよかつたらどう？」

いきなり振られた話に「え？」と首を傾かたむげると、男性社員はあからさまにどぎまぎした様子で、なぜか慌てたように手を動かした。

「社長が一斉退社を言い出した日は、暇なメンバーで飲みに行くことが多いんだ。もしよかつたら……、あ、でも、きつと予定あるよね。無理しなくていいよ」

「あ……、あの」

「いいよいいよ、無理に來なくて大丈夫だから」

そう言われると、なんだか遠回しに來るなと言われているような気がして胃のあたりが重くなった。そしてすぐさま、なんてネガティブな思考だと自嘲する。

どちらにしろ、今日は予定があるから参加はできないのだけれど。

「あの、きよ、今日は予定がありません」

「そっか！ いきなり誘っちゃってごめんね！ 椎名、外で待ってるから早く来いよ」

言葉の前半を私に、後半を椎名さんに話しながら、彼がばたばたとオフィスを出ていく。

その背に『誘って頂いてありがとうございます』と声をかけようとしたけれど、喉に引っかかって出てこなかった。

もう少し愛想よく対応できるようにしたい、と願望を心の中で呟つぶやいてみる。

それを十何回か繰り返しふと我に返ったとき、幼稚なことをしているような気がして恥ずかしくなってしまう。思わず顔を覆った。

「瑠璃？」

ぱつと顔を上げると、ビジネスバッグを持った背の高い男性が私の真横に立っていた。この事務所副社長である羽角さんだ。フロアに残っているのは、どうやら彼と私だけらしい。

「あ、はい」

「どうしたの。すごい顔してたけど」

くすくすと笑いながら背をぼんと叩かれる。慌てて首を横に振った。

「いえ、別に」

「そう？ 目をかつ開いたまま動かないから何事かと思った」

「かつ開いてなんていませんよ……」

真つ黒い髪を揺らしながら、副社長が背を丸めてこちらを覗き込んでくる。

目の前に大層煌びやかなお顔が現れたものだから、慌てて椅子のキャスターをうしろに転がし物理的な距離をとった。

秀麗な容姿は、ただそこにいるだけで眩しい。

「どうして瑠璃は俺が近づくと条件反射のように逃げるかな」

形のいい眉とくつきりとした目元が、困ったように歪む。

この事務所の副社長である彼、羽角晶斗さんは、他のデザイン事務所で働いていた私に引き抜き

の話を持ってきてくれた恩人である。

ふわふわとした雰囲気の人当たりが柔らかく、でも仕事にはストイック。

デザイナーとしても人間としてもお手本のような人で、誰よりも尊敬している。

私にとっては、お会いしたら拝みたくなる神様みたいな人である。

この事務所に入ってから一か月だが、彼とは私が学生の頃からの知り合いで、出身大学が同じなのだ。

といっても、副社長は私の六つ上の三十二歳なので同時期に在学していたわけではなく、彼がO Bとして学祭にやって来たのをきっかけに顔見知りになった程度の、薄い付き合いだったけれど。

私が社会人になって、前の職場に勤めだしてからは、一社合同でデザインの仕事をした際同じチームになったり、その他コンテストやパーティーで何度も顔を合わせたり。仕事上でなにかと縁があった。

「逃げているわけではなく、恐縮しているだけです」

「なにそれ」

ふふ、と微笑む仕草はとても上品だ。

私には、副社長の所作のひとつひとつが優雅で、気品に溢れているように見える。

「瑠璃は今日の飲み会参加するの？」

「いえ、私は予定がありません」

「そうなんだ。残念だな。瑠璃とゆつくり話したかったのに」

先ほど思い切りネガティブ思考に陥ったので、そういった言い方をしてくれる彼の優しさが心に沁みだ。ありがたいな、と感謝の眼差しを向ける。

「あ……と、副社長は参加されるんですね」

「それ、なんかやだなあ」

「はい？」

「副社長じゃなくて、これまで通りでいいよ。うちに来た途端よそよそしくない？」

「いえ、そういうわけには」

先輩社員の方々が役職で呼んでいるのに私だけ「羽角さん」と呼ぶ勇気などありません。

そう、はつきり言うのはなんだか気が引けるので、曖昧に濁して顎を引く。

「むしろ名字じゃなくて、名前で呼んでくれてもいいのに」

「無理です」

思わず即答すると、ははっ、と軽い笑い声が返ってきた。

「仕事はどう？ 慣れてきた？」

「やっとなんか……やらせてもらっている感じです。毎日学ぶことばかりで、楽しくて」

「そっか。それはよかった。期待してるからね。困ったことがあったら、なんでも言って」

「ありがとうございます」

彼は以前から、なかなか人と気さくに話せない私にこうして声をかけてくれる。ここに来てからはことさら気遣ってくれているのも感じている。

人見知りの私が、事務所内で唯一落ち着いて話せる人だ。

誰に対しても分け隔てなく優しく穏やかで、仕事のことだけではなく人としてもとても尊敬しているし、憧れの対象。優しいだけでなく、線引きはきっちりしているところも。だめなことばだめだと、笑顔でばつさりいくところも含めて、私もいつかこういう人になりたいと思う。

——けれど、ひとつ。

ひとつだけ、ずっと気になっていることがある。

そっと顔を上げ、洗練された上品オーラをまき散らしている副社長を見つめる。

「ん？」

目が合っつてすぐ、彼が首を傾げた。

「あ、と。いえ、なんでも」

「どうしたの？ 瑠璃、今日なんか変じゃない？」

そんなことありませんよと苦しい否定をしながら、そう長くはないこの会話で何度名前を呼ばれたらだろうと考える。

私はずっと気になっていること。それは、未だ彼に名前で呼ばれることだ。

もちろん嫌なわけではない。

こうして人目のないときには一向に構わないのだ。けれど、周囲に誰がいるとき……特に女性の目がある際には、名前じゃなくて名字で呼んで欲しいな……なんて。

過去にやんわりとお願ひしたことはあるのだが、私の言い方がやんわり過ぎて残念ながら伝わら

ず。さつき名前の話題になったときに再度、さらっと言えばよかった。

というのも、前の職場で彼と一緒に仕事をした際、彼と親しいという理由で女性社員にかなり激しめの敵意を持たれてしまったことがあるのだ。

それに対して私が上手く対応できなかったのが一番大きな問題だが、副社長に名前で呼ばれていることも、彼女たちを刺激する理由のひとつだったような気が……しないでもない。

この事務所内にはわかりやすく彼を狙っている女性はいないようだけど、今後どうなるかはわからない。

実はけっこうなトラウマになっているのである。

そう、つまりはこの思考、全力で保身のためだ。

尊敬している人に対して無礼だろうかとうしろめたく思いながらも、心から願ってしまう。頼むから名字で呼んでくれと。保身を優先して全面的にごめんなさい。

「……あれ、瑠璃。デスク、随分散らかってるね」

少しだけ顔を傾けた彼が、私の背後のデスクに視線を注いだ。

「あつ……、すみませんすぐに片づけます」

「それがいいよ。鞠哉さんに見つかる前にね」

「鞠哉さん」とは、この事務所の社長のことだ。

社長にはいくつもの持論があり、そのうちのひとつが「デスクを整頓できない奴はいつまでたっても一人前になれない」というもの。

他にも「食べ物の好き嫌が多い奴は人の好き嫌いも多い」とか「靴を揃えて脱ぐ奴は仕事の呑み込みが早い」とか。

それが確実に当たっているのかは疑問だし、例えばデスクが汚いからといって仕事を回してもらえなくなるわけではないが、どれも正しておいて損はない習慣だ。

なのに、気を抜くとすぐこうなってしまう。

散乱している書類。放りっぱなしのペン。引き出しの中はもつと酷いことになっている。

急いで片づける私を、副社長はその場に留まったまま見ている。

「……」

引き出しの中をひっくり返してすぐ。目についたのは、鮮やかな黄色だ。深夜まで残業したあの夜に貼られていた黄色の付箋。思わず息を呑んだ。

咄嗟にそれを引っ掴んで、隠すようにバッグの中へと押し込む。

「なに？ なにか隠した？」

「いえ、なんでもありません」

「そう……。あ、ねえ。前話したお菓子のパッケージデザイン、正式に依頼を受けることになったよ」

「えっ、そうなんですネ」

大手食品会社のパッケージデザインとは、かなり大きな仕事だ。

副社長はいくつもの案件を掛け持ちしていて、ただでさえ忙しいのに、まだキャパがあるなんて



すごい、と単純に驚いた。

「瑠璃もチームメンバーに入ってる。同じチームで仕事するの久しぶりだね。忙しくなるだろうけど、楽しみにしてるよ」

「あ、ありがとうございます。頑張ります」

社長がノー残業デーと言いつ出した翌週には必ず忙しくなるというジंकクスは、本当だったんだ。

ああ、今日は残業できないけれど、来週からまた気合いを入れて頑張らないと。

学んだことはすべて吸収して早く自分のものになりたい。早く早く、一人前にならなきゃ。引き抜いてくれた副社長の期待に応えるためにも。

そう胸の内で呟きながら、なんとか掃除を終える。

それから事務所の入り口にあるクローゼットへ移動し、そこから半袖の白いジャケットを取り出した。副社長はというと、今しがた空いた私の席に座りスマホをいじっている。

「気になるから、話戻していい？」

「なんですか？」

「さっき、あんなに慌ててなにを隠したの？」

「あ、えと……。副社長が気にされることではないと思いますよ」

「えー、そういうこと言う？」

ふっと目を細めた彼が、なんだかとても寒気のある笑顔を向けてきた。

え、なに今の顔。やめてすごく怖い。完全に笑顔でばつさりいくときのやつだ。

「その、家に帰ってから捨てようと思っていたものが、引き出しに入りっぱなしになっていて驚いただけです」

私が早口でそう言うと、彼は目を丸くしてから眉根を寄せた。

「家に帰ってから捨てようと思ってたもの……？ 職場では捨てられない重大ななにかを忘れてたの？ 存在自体？」

「あ、はい……。むしろ思い出しなくなかったものでして」

「なにそれ、余計に気になるんだけど。一体どんな……」

「あつ、あの、私これから予定があります。すみません、お疲れ様でした」

「あつ、こら、瑠璃」

話が続いているのは承知の上で、事務所の扉を目指して駆け出す。

あの付箋について説明なんてできるわけがない。なんか副社長の顔怖いし、とりあえずごまかして逃げるのが吉。

扉を閉じようとしながら「お先に失礼します」と全力で頭を下げると、「本当に失礼だよ」と笑い声が飛んできた。

わずかに顔を上げて目を動かす。そこには先ほどとは違う種類の、いつもの彼の笑顔があった。少しほっとした。

オフィスを出た私は、駅までの道のりを歩きながら夕焼けの空を見上げる。

ようやく七月が終わる今の季節。

今年の夏は本当に暑くて、この時間になってもなかなか気温が下がらない。

日中、夏の日差しに照らされたアスファルトは、まだ熱を持ったままだ。

「あれ」

ふと、道端に、都心には不釣り合いな季節外れのどんぐりが落ちているのを見つけた。しかも、この辺りにどんぐりのなるような木はないはずだけだ。

なんだか嬉しくなって、いそいそ拾い上げる。手のひらに乗せてじっと観察してみた。丸々としていて少しの割れもない。やけに綺麗な緑色のどんぐりだ。誰の落としものだろう。

「かわいいなあ」

思わずそう呟き、持って帰ろうかなあと考えたら意図せず頬が緩んだ。

どんぐりを包むため、ジャケットのポケットに入っていたハンカチを取り出す。

そうしてハンカチと一緒にポケットから飛び出したのは――

二つに折り畳まれた、黄色の付箋。

「え……」

どうしてこんなところに？

ついさっき、バッグの中に放り込んだはずなのに。

ジャケットのポケットには間違っても入れていない。

眉を顰めながら、とりあえずハンカチでどんぐりを包む。

それをポケットに戻し、ゆつくりと付箋を開いた。

『君は雪みたいだ。僕の熱い気持ちを前に、溶けて姿を消してしまえよう』

ぽかんと呆けながら文字を追っていく。

バッグの中に放り込んだのとは違う文章。つまりこれは、私に届いた二つ目の付箋ということになる。

「か、勝手に私の姿を消すなよ……」

困惑と、ちよつとした恐怖の入り混じった呟きが、夕方の空気に溶けた。

3

「で、それが問題の付箋？」

「そう」

どんぐりに喜び、新たな付箋の登場に困惑してから一時間ほど。

馴染みの居酒屋で待ち合わせをしていた友人に、挨拶もそこそこに件の付箋を差し出した。

この友人ならば、ネタとして笑ってくれるだろうと思ったのだ。悪戯だとわかっていても微妙な恐ろしさを感じる出来事を、彼女に思い切り笑い飛ばして欲しかった。そうしたらさっさと忘れられる気がした。

「わあ……なんとも情熱的な」

けれど、友人はそんな私の予想に反し、真面目な表情で黄色い付箋を見つめている。ただ類は真つ赤だ。私を待っている間に相当量飲んだのだろう。酔いが、かなり進んでいるらしい。

「あと見てみて、これ」

緑色のどんぐりを「かわいいでしょ」と掌の上で転がす。

しかし、友人は気のない返事をするだけだ。また拾ったの、好きだねえと全く気持ちのこもっていない言葉が飛んでくる。

「こんな綺麗などんぐりが、緑の全く見当たらない都心に落ちてるってすごくない？ 誰の落とし物かなあって、なんかいろいろ考えちゃった。こう、どんぐりの壮大なストリーというか。リス界でこのどんぐりを巡って争いが起きてるかも、とか。でね、ほら、ちよつと不思議な力を使える女の子が手を貸してたりして……」

「ほら、じゃないよ。また突拍子もないこと考えて……、じゃあなに、それはリスの落とし物だっ  
て言いたいなの？ 漫画の読みすぎ」

中学時代からの友人である美咲が、ななめに流した茶色の前髪をいじりながらちらりと視線を寄越す。

私は「違うよ」と反論し、どんぐりをハンカチに包み直した。

そんなことが現実起きるなんて思うわけない。そうじゃなくて、ただ私の頭の中に壮大なストリーが広がっただけの話だ。緑色のどんぐりをきつかけに。

「瑠璃が綺麗な石だの四葉のクローバーだの、なんか小学生みたいに収集してにやにやしてるのは

今さらだけど。今度はどんぐりですか」

「……二十六にもなつて、どんぐりを拾って喜んでるの、やっぱりおかしいかね」

「どんぐりは別にいいよ。それよりそのあと広がる物語が痛い。嫌いじゃないけど。あと、リス界で争いが起こるほど神々しいどんぐりが道端に落ちてる意味もわからない」

ストリーにまできつちりだめ出しをされて、「ひどい」と抗議の声を上げる。

すると、この付箋よりもどんぐりばかり気にしているあんたがおかしいんだと鼻をつままれた。酔っ払っているからなのか、今夜の美咲は普段に比べて手厳しい。

「それよりこつちだよ、こつち。あのさあ、すつごい疑問なんだけど……最初の付箋は、二週間前に渡されたんでしょ？」

「渡されていない。パソコンに貼ってあったの」

追加でオーダーしたホッケを見下ろして、箸を手取る。

私の視界の中心には脂ののったホッケがあり、美咲の姿はそこから外れている。しかし、彼女から呆れた目でじつとり見られているのはなんとなくわかった。

「なにその無意味な訂正」

予想通り、美咲は呆れているようだ。

これ以上ない呆れ声には口をつぐむことしかできない。

ホッケを食しながらそつと様子を窺うと、彼女はビールを呷っていた。

「ねえ、美咲。その付箋、笑い飛ばして。お願い」

「や、全然笑えない」

だんっ、と派手な音を響かせて、美咲がジョッキをテーブルに置く。

なんで笑ってくれないの。いつもならこういうとき大笑いしてくれるのに。笑ってよ、お願い。

「どうかね、さつきからどうして瑠璃はこの付箋の内容について茶化してるだけなのかな？」

「だってツッコまずにはいられないよ。おかしいでしょ。勝手に花にされたり雪にされたりしてるんだよ。しかも最終的に消されてるし」

「いやいや、消えそうってだけで消されてないでしょうに……って、そうじゃなくて！ 内容はこの際どうでもいいの！ もっとこう、真っ先に気にしなきゃいけないことがあるでしょ？ これを誰が書いたか考えようよっ。そっちを気にして！」

声を大きくした彼女が、テーブルの上にある二枚の黄色い付箋を指で叩く。

「あー……」

私が気のない返事をする、「やる気出してっ、頑張つて！」と今度は拳でテーブルをどんどんと鳴らし始めた。

「ちよっと瑠璃わかってるの!? これラブレターだよ、ひつつさしぶりの恋の予感だよ！ 確かに渡し方といい内容といい、かなり個性的だけど、でもラブレターだよ！」

……なるほど。美咲にかかると、この不気味な付箋も“個性的”で済ませてしまえるのか。そうくるとは思ってもみなかった。

「あのさ瑠璃、差出人の目星くらいはついてるんだよね？」

「わかんない。誰だろうとは思ったけど、探してはいないし……」

「もう、なんで……あっ！ あの人は？ 瑠璃の神様。めっちゃ顔が綺麗で王子様っぽい……羽角さんだっけ」

「まさか。あの人が、こんなことするわけないよ」

美咲の冗談は軽く流したが、副社長が王子様っぽいという表現は頷ける。容姿も所作もそうだし、煌びやかな衣装もなんなく着こなしそうだし。

「そもそもこれ、ラブレターではないと思うけど」

彼女は先ほど“恋の予感”と言ったが、私には悪戯としか思えない。

そう主張すると美咲から、こんな手の込んだ悪戯をして誰が得をするのだとまた口撃を受ける。

「あのね、反応見て楽しみたい愉快犯なら、瑠璃は選ばないから。職場の瑠璃は絶対反応薄くてつまらないから。つまらないからっ」

「職場での私を見たことないくせに、つままないって二度言わないでくれる!? で、でも確かに、職場だと顔も反応も、緊張して硬くなっちゃうんです、なに話したらいいんだろうって考えてると逆に話せなくなっちゃうんです、常々直したいとは思ってるんです……!」

ピンポイントでコンプレックスをつつかれ、しおれながらも一応言い返す。

私が外見で“冷たい”とか“クール”とか言われることを気にしているのは美咲が一番よく知っている。情けない話だが、親しくない人の前ではリアクションが薄くなってしまうのも。

それをあえて持ち出してまで発破をかけてくるのは、私を心配してくれているからなのだろう。

「もうっ。どうしてそうやって頑かたくなに恋愛を避けるの。心配すぎていつそ腹立たしい……！」  
心配と怒りがどう繋がるのか、私にはいまいちわからない。

「私、瑠璃がいつまでも同じところで……動けないでいるみたいな気がして、それが本当に心配だよ」

わからないけれど、彼女のまつすぐな優しさが私は好きだ。

嘘をつかないところも、私と違っていつだってポジティブ全開なところも。私の過去の出来事に對して、私以上に気を配ってくれるところも。

「美咲」

本当に悲しそうな顔をして、おしぼりをいじりだした友人の名を呼ぶ。

「私は悔くやしいよ。瑠璃が、あんな男をずっと忘れられないまま引きずっていることが。だって、あれから何年たったと思ってるの？」

その瞳にうつすら涙が浮かんでいるのが見えた。

何年たっても私の悲しみを忘れずにいてくれる優しい友人の細い肩を、そっと叩く。

「もうとつくに忘れてるよ。未練なんて全くない」

「……本当に？ あいつに対する気持ち、少しも残ってない？」

「これっぽっちも」

「もうっ、じゃあなんで彼氏作らないのようー！」

「うーん、やっぱり自信がね、どうしてもなくて。恋愛における自信。仕事を楽しいってのもある

かな」

「瑠璃が失なくしたのは、恋愛に関する自信だけじゃないでしょう。そもそもがそこそこネガティブな瑠璃が、やばめのネガティブになったのはあの男のせいじゃん！ だからね、その自信は、新しい恋でつけたらいいと思うわけ、私はっ」

本格的に泣いている美咲に、付箋ふせんをずいっと突きつけられる。

「だから……、この付箋ふせんは悪戯いたづらだって。だけど今日まで忘れていられたから、美咲に笑い飛ばしてもらったら、すっきりしてまた忘れられるかなーと思って話したっていう……」

「えっ、忘れてたの。こんなにインパクトのあるものを……!？」

「あー、うん」

「こんな熱烈なラブレターなのに……、書いた人も報われないね……」

「え、美咲は気味が悪いと思わない？」

「うん、特には。差出人いいぞ、もつとやれ。もつと瑠璃にアピールしろ」

「それ、人ごとだからじゃないの!？」

そう尋ねると、即座に否定が飛んでくる。

「違いますー」

「本当に!? これが自分の身に起きたとしても、差出人にさらなるアピールを要求するわけ!？」

前のめりで追及しても、彼女の答えは同じだ。

美咲がこれを真面目に「アリ」と言うなんて、にわかには信じがたい。

こうなつてくると先ほどこの付箋を「個性的」の一言でまとめたのも、酔っているせいなのではないかと勘繰りたくなつてくる。

美咲からアルコールが抜けたらもう一度聞いてみなきゃ。

——けれど結局、付箋については笑い飛ばしてもらえず。

そのあとハイペースで飲み続けた美咲が珍しく酔い潰れてしまい、自動的に私が彼女を送り届けることになった。

無事に美咲を彼女のベッドまで運んだら、なんだか帰るのが億劫になつてしまい、美咲の隣に寄り込み手足を投げ出す。

明日は休みだ。もうこのまま泊まつて行こう。歯磨きだけして……お風呂は明日貸してもらえばいいか。

そうして、美咲のベッドで眠りについたら翌朝。

私が目を覚ましたとき、彼女はもうすでにキッチンに立つていた。

酔い潰れたことを申し訳なきように詫びながら、温かい緑茶とご飯と、おいしいそうなお味噌汁にふわふわの卵焼きまでお盆に載せて、こちらに差し出している。

「別にいいのに。私だつて潰れることあるし、お互い様なんだから。でもあれだね、美咲は昔からこういうところが、ものすごくかわいいよね」

「なんとでも言つて……昨日ほんとにごめん……」

今シヤモも焼いてるから……と、しゅんとした低い声で続けるものだから、その姿がまたかわいくて笑つてしまう。飲んでいた緑茶を嘔き出しそうになつた。

「美咲さん、ごはんのおかわり下さい」

「どうぞどうぞ、いくらでも。しかし君は本当に米が好きだね。そしてよく食べるね。食べた分はどこへ消えてるの?」

「まあ、胸じゃないことだけは確かだよね」

「えっ、別に私、瑠璃が貧乳だなんてそんな! 細いのによく食べるねつただけだよ」

「貧乳つてはつきり言わないでくれますか。僻みという名の呪いをかけるよ。明日の朝起きたら、あなたもまな板に……」

「うわ怖っ。貧乳の呪いだ」

「巨乳撲滅」

冗談を投げ合いながらおいしい朝食を食べたあと、片づけを申し出たものの断られてしまう。

「瑠璃、お風呂溜めたから先に入つてきて」

「え、いいの?」

「いい」

「なんか美咲の旦那さんにでもなつた気分……」

「昨夜酔つ払つて介抱させたお詫びに、今日一日瑠璃の嫁に徹する。タオル出しとくから、旦那様」

わざとらしい物言いがまた笑いを誘う。結局、お言葉に甘えることにした。

「はいこれ、部屋着。使って」

「なにからなにまで、すみません」

借りた部屋着を手に洗面所へ。居酒屋でついた煙草の匂いがするブラウスを脱ぐ。

それからふんわりとした形の膝丈シフオンスカートや下着も全部脱いで真っ裸になり、着ていたものを適当に畳んでいたときに——気づいた。

とんでもないところに貼りつけられている黄色い付箋に。

「……冗談」

三枚目の黄色の付箋。

たった今まで穿いていた黒い膝丈スカートの裾の……裏側に。

ご丁寧にセロテープで貼りつけられているそれを見つけた瞬間、気味が悪いどころか怒りが湧いた。

「もう!! なんなの!!」

怒りに任せてセロテープを剥がして確認する。

これまでは手のひらサイズの正方形のものだったけれど、今回は細長い形をした付箋だ。折り畳まれて、小指の第一関節ほどの大きさになっている。

『君の肩にとまる鳥になりたい。耳元で囁き大空の夢を見せてあげる』

「っ、なにこれっ、信じられない!」

一体誰なのかなあ、なんて呑気なことを言っている場合じゃない。

「瑠璃? どうした、の……」

一人で騒いでいた私を不審に思ったのか美咲が洗面所に入ってきた。

私が素っ裸で付箋を睨みつけているのを見て、目を丸くしている。

「私、決めた。この付箋について気にしないのも、忘れるのもやめた」

「え……ねえちよつと、せめてパンツ穿いたら」

「パンツなんてどうでもいい! 絶対に見つける!」

いいからパンツ穿きなよ、と呆れ顔で繰り返す美咲に、付箋の貼りついていた場所を説明する。

それから現物を手渡した。

「あー……これ、よく気づいたね。しかしどうやって貼ったんだろう……、スカートの中って」

はははと笑う美咲の頬は引き攣っている。さすがに若干引いたらしい。

「瑠璃これ、耳元で囁って夢見せてくれるって。濃いね」

「むしろ私が耳元で喚いて、悪夢を見せてやろうと思う。絶対に探し出す……っ!」

「あー、でもこんな変態じみたことをする人なら、瑠璃がそんなしつら逆になら喜ぶんじゃない?」

はい、と美咲に付箋を返されて、手にした瞬間、握り潰した。

これは悪戯の範疇を完全に超越した変態行為だ。

犯人を絶対に見つける。そして、なにかしらの方法で報復!

「美咲。これまでの付箋の文面をどう思う」

「え、愛重めだよ。個性的」

「これでもシラブレターだとして、内容と渡し方含め美学的にはあり？」

「うーん……昨日まではありだったけど、さすがにスカートの中に貼ってくるのは、な、ですかね。散々偏つてごめん。今はむしろ気をつけてと言いたい」

素面の彼女は『いいぞ、もっとやれ』とは言わず、本気で心配そうに瞳を揺らしていた。でも昨日までは真面目にありだったのか。あと「個性的」という表現にも変わりない。

彼女の回答に少しだけ気が抜けたが、一度沸騰した付箋への怒りはなかなか冷めることはなかった。

——その日以来、私の頭の中は黄色い付箋のことでいっぱいになった。

正確には、こんなことをしてかした人間は一体誰なんだ、という怒りに埋め尽くされることになったのだ。

4

もし、恋をすることで動く時計があったとしたなら。

想いが届いてもそうじゃなくても、誰かを「好き」だと想うことで、針が動く時計があったとしたのなら。

私の時計は、一体どれくらい進んでいるのだろう。

私が唯一「好き」という気持ちを覚えたのは、幼稚園の頃だった。

相手は小さい頃からずっと一緒にいた幼馴染だ。

恋人という関係になったのは中学二年生のときで、私は彼のことが本気で好きだったし、ずっと一緒にいるのだろうと信じて疑いもしなかった。

けれど結局、大学生のときに別れた。付き合い合った期間は五年間。私が振られた。彼に、他に好きな人ができてしまったのだ。

それも、私ときちんと別れる一年近くも前から、その人と二股状態だったらしい。

そして彼は、そのことをあまり悪いとは思っていないようだった。

私が長い時間恋をしていた彼は恋愛に対してそういう価値観を持った人間だった。ただそれだけのことだ。

彼への想いは消え去り、長い夢から覚めたような気分になったものだ。

美咲が言っていた通り、私はあの恋で様々な自信を失った。

それは例えば、二股をかけられていたことに長い期間気づかなかった事実であったり、恋愛における彼の価値観を、ずっと一緒にいたのに正しく理解できていなかったことであつたり。

だから、今の私が恋愛に対して消極的なのは過去の恋愛そのものに拘っているからではなく、結局は自分の問題なのだ。

その癖、本当は恋愛に憧れてもいる。



子供っぽい願望だと自覚しながらも、大好きな少女漫画の中の登場人物みたいに、夢中になってその人のことを考えているだけで時間が過ぎてしまうような瞬間をまた味わえたらと願ってしまうのだ。

自分がヒロインになれるとは思わないし、そんな自信は微塵もない。でも、それでも。

もう一度人を好きになればと願っている。いつか、漫画の中の誰かみたいに。

こんな恥ずかしいこと、美咲にだって言えない。

——あの頃、私は恋の時計の針を一体どのくらい進めたのだろう。

そしてこの先、その時計の針が進む日は、やってくるのだろうか。

このところ、ふとした瞬間にそんなことを考えてしまうのは、多分。

毎日毎日、あの付箋を寄越した相手のことばかり考えているからだ。

それはまるで、時計の針を進めていたあの頃のように——今の私は一日のうちの長い時間、あらゆる人物に頭の中を占領されている。

三つ目の付箋が届いた日、美咲の家から帰った私はまず、犯人を探すために今までの状況を整理してみることにした。

ひとつ目の付箋はパソコンに貼りつけられていた。

あの時間まで残業していたのは私だけだった。コンビニへ行くために十五分ほど事務所を離れた

けれどオフィスの鍵はしっかり締めて出たはずだ。

二つ目の付箋が届いたのは、社長が突然ノー残業デーと言い出した日。

事務所のクローゼットにかけていた半袖のジャケット、そのポケットの中に付箋が入っていた。

三つ目も同じ日だ。貼られていた場所はスカートの内側。

いつ、あんなところに付箋を貼られたのだろう。それも全く気づかせないように。

冷静になって考えてみると、そんな機会を与えてしまったであろう瞬間には容易に思い至ってしまった。恐らく、昼休みのときだ。

お弁当を持参している私はデスクでお昼を済ませることがほとんどで、あの日ももちろんそうだった。

他の社員は大抵外に出て食事をとるので、昼休み事務所に私のみという状況は珍しくない。

そして食べ終わって余った時間は、こっそり漫画を読むか昼寝をして過ごしている。

昼寝なら、横になってしまおうと寝起きが辛いのでデスクで。漫画を読むなら仮眠室だ。

あの日はどうだったろう。はつきりとは思いつけないが、スカートの内側に貼られたということ。昼寝をしていたのかもしれない。

困ったことに相当眠りが深いので、スカートの内側に付箋を貼られていたとしても気づけない自信がある。心から欲しくなかった自信だ。

そうしてただ状況を整理しただけで、犯人は事務所内の二人に絞られていた。

二度目三度目のときなど、犯行可能な人物は一人しかない。

私が昼寝をすること、眠りが深いことを知っていて、尚且つオフィスの鍵を常に持っており、あの日みんなどお昼に行かなかった社員。

犯人を探すと決めてから目星がつくまでは、驚くほどあつという間だった。

スカートの内側に付箋を貼るだなんてふざけた行為。文学的で歯の浮くような文章。

存在を全く隠す気のないその行動はまるで、犯人に「早く気づけ」とでも言われているかのよう。

あんなに激しい怒りを覚えたはずなのに。

付箋の送り主がわかった瞬間、そんなものはどこかへ吹き飛んでしまった。残ったのは疑問だけだ。どうして？ なののために？

あんな変態じみたことをする人じゃないと知っているからこそ、疑問は膨らむ一方だった。

三つ目の黄色い付箋が届いた日から一か月あまりが過ぎた今もずっと、そのことばかりを考えている。

こっそり観察するつもりで様子を窺うと何度もぶつかる視線。

けれど本人に確かめることもできないまま、時間だけが過ぎていく。

あれから付箋は届いていない。

なのに送り主のことが気になって仕方がない。どうしようもないほどに。忘れることなんて、とてもできそうにない。

「瑠璃。ちよつといい？」

「はい」

今日も麗しい微笑みを向けてくる副社長に、疑いの視線を向けてしまう。

いつも通り接しようと思っているのに、それがなかなか難しい。

この人があんなものを、あんな場所に貼る？

こんな上品な人が、あんなことをする？

「……瑠璃？ 聞いている？」

「す、すみません。もう一度お願いします」

「この間ね、クライアントさんに紅茶をもらったんだ。で、時間あるとき瑠璃に淹れて欲しいなって。瑠璃の淹れるお茶、おいしいから」

自分で淹れるとどうしてもおいしくならなくて、と副社長が困ったように笑う。

「わかりました。じゃあ今から……」

「ううん。今すぐじゃなくていいんだ。時間があるときで。ごめんね、こんなこと頼んじやって」  
前の職場では女性がお茶を淹れることが当然だった。

でもここでは、飲み物は必要なときに各々が用意することになっている。

自分のことくらい自分でやれ、というのが社長の考えなのだ。

それは副社長も同じ考えだそうで、だからこうして時折「お茶を淹れて」と頼みにくるときは、いつだって申し訳なさそうだ。

私はこういふところにも副社長の人柄のよさを感じる。

——やっぱり、私の思い違いなんじゃないかな。この人が、あんなことするわけないよなあ……彼を尊敬する箇所は数えきれないほどあって、それを目にするたびに、私は副社長を疑っている自分を疑う。彼を疑って、自分を疑って。この一か月ずっとその繰り返しだ。この堂々巡りは、精神が非常に疲弊する。

「大丈夫ですよ。今ちようどお茶を淹れに立とうと思っていたので」

気にしないで下さい、と顔の前で手を横に振る。すると彼はとても嬉しそうに笑った。

「ありがたい。紅茶缶は給湯室の吊り戸棚の中に入れてあるよ。色はモスグリーンです」

「わかりました」

「すみません、お願いします」

大仰に頭を下げた彼に恐縮し、手も首もぶんぶんと左右に振り肩を竦めた。

給湯室のある廊下へと繋がる扉を開き、足を進める。

フロアと廊下は分厚い扉で区切られている。廊下を東に進むとシャワールーム、パウダールーム、トイレ、仮眠室があり、西に進むと資料室と倉庫と給湯室がある。給湯室は西側の一番奥の部屋だ。

給湯室に入り、まずはポットにお湯を注ぐ。

ポットを温めている間に棚からカップを取り出し、それから昇降式の吊り戸棚に手を伸ばした。

「モスグリーン、モスグリーン……。あ、これが」

社員がそれぞれ用意しているお茶のパックや瓶、缶が並ぶなか、モスグリーンのそれはすぐに見つけることができた。棚の一番手前、とてもわかりやすい位置に置いてある。

よいしょ、と小さな声で言いつつ、頭の上で缶を持ち上げた。

「え……」

モスグリーンの缶の底に、鮮やかな黄色の付箋。

どくん、と心臓がわかりやすく音を立てる。

どうしてかはわからないけれど、泣きそうになった。

紅茶缶の底からゆつくりと付箋を剥がし、連なる文字に目を走らせる。

『人は情熱を火にたとえるけど僕の気持ちは正しくそれだ。君への想いが募るあまり、自身まで焼きつくしかねない』

あの人の上品な微笑み。優雅な仕草。

人としてもデザイナーとしても、いつだって私に手本を見せてくれる完璧な人。私にとっては神様みたいな人。

「ほ、ほんとうに、羽角さんなんだ……」

信じられないし、信じたくない。

驚いているし、彼を信頼する気持ちは、ぴしりとヒビが入った。

唐突に、美咲の声が頭の端で響く。

“こんな熱烈なラブレターなのに……、書いた人も報われないね……”

ぶわ、と耳の奥になにかが流れていく感覚。

どこもかしこも、皮膚という皮膚がカッと熱くなる。

「……君への想いが募るあまり、自身まで焼きつくしかねない」

声を出してみると心臓の高鳴りが余計に酷くなる。

私はそのまましばらくの間、付箋に書かれた文字を目で追いつけた。  
黄色の付箋が「ラブレター」であると、全身で意識しながら。

5

ふらふらと頼りない足元に注意しながら、湯気のたっているカップを運ぶ。

副社長のデスクへと近づき、なるべく顔を見ないようにしてそっと置いた。

「瑠璃……」

「あ、いたいた。水原」

彼が声をかけてきた瞬間に、背後から社長に肩を叩かれた。

副社長の前で平静を装える自信もなければ、どんな顔をしたらいいのかもわからない。

だから、社長に呼び止められてほっとした。

「ちよっと回したい仕事が……、おい。お前どうした。大丈夫か？」

私の視線の先で、社長が怪訝な表情になる。

「あー、と……」

「顔真っ赤だけど。顔つつーか首まで真っ赤だけど。体調が悪い？」

「い、いえ」

相對するのが社長になって、ほっとしたのも束の間。

死ぬほど動揺したのが尾を引いて上手く言葉を返せない。口がちゃんと回っていないような気がする。

そしてそんな私を、副社長がじっと見ている。

視線をうるさく感じるのは自意識過剰だろうか。

「あの、社長。体調が悪いわけではないので、大丈夫です。任せて頂ける仕事がありましたら、回して下さー」

滑らかなには動かない口をできるだけゆつくりと使って、言葉を発する。自分でもわかるくらいに声が震えた。

「ほんと、真っ赤だね。大丈夫？ さっきはそんなことなかったのに……なにかあった？」

横から会話に参加した副社長の言葉に驚いてしまう。悔しくてすぐに唇を噛んだ。視線の端でちらりと彼を見ると、心配そうに眉尻を下げている。

思わず、先ほど見つけた黄色い付箋を押し込んであるスカートのポケットを叩いた。

なにか『なにかあった？』だ。信じられない。

なにかなら、ありましたけど。今、私が死ぬほど動揺しているのはあなたのせいですけど。

文句が零れてしまいそうだ。

どうしてそんなに平然としていられるんだろう。

「ご心配……ありがとうございます。大したことありません」  
なんでもないなんて絶対に言いたくない。

そうやって私が返した、微妙に的の外れた返答も棘のある言葉も、副社長はくすくすと笑って受け止めている。

その様子がすぐ楽しそうなのは気のせいであって欲しい。

この状況を楽しむとか、どういう神経してるんだと言いたくなる。上品さが微塵もない。気品はどこへいった。

だというのに思い切りドキドキしている自分も意味がわからない。

「片方、割と急ぎの案件んだけど、本当に大丈夫か？」

言いながら社長が差し出してきたデータを受け取り、急ぎの仕事の内容について耳を傾ける。

「はい、大丈夫です。やらせて下さい」

「そうか。じゃあ頼むわ。で、もうひとつの仕事はポスターのラフ画な。もちろんチェックはするけど、好きにやってみて」

「えっ、いいいんでしょうか」

ラフ画を任せられるということは、デザインそのものを任せられるということだ。普通は社長や羽角さんのようなディレクターが描くもので、私のような新参者がやらせてもらえるような仕事じゃなかった。

「え？　うちは俺もアキもデザイナーにラフ画をどんどん振っていくけど」

事務所によって仕事のやり方は違う。

わかっていたが、以前の職場と違いが大きすぎて驚いてしまう。

「クライアントの意向はデータになんとなく入ってるけど、固まってるみたいだからこちらからも二三提案するつもりで。とりあえず、かわいい系のキャラクターの案はマストで欲しいらしい」

「はい、わかりました」

「無理なら早めに言えよ。アキに仕事をスライドするから」

「アキ」とは羽角さんのあだ名だ。晶斗だから、アキ。事務所内で彼をそう呼ぶのは社長だけが。にやりと唇の端を上げた社長が、副社長のデスクを軽く叩く。

「俺？　キャラクターなら絶対瑠璃だよ」

「もちろん、俺もそう思ったから水原に振ってみたんだって。お前は補欠要員」

「ふーん、補欠。この事務所にそんな制度があるなんて知らなかったな」

「うるせ。水原、安心しろよ。補欠確保したから」

「は、ははは……」

社長と副社長の冗談の応酬はいつものことだ。そして、その冗談が突然こちらへ飛んできたりする。それも。

それにしても副社長が私の補欠なんて、恐れ多い冗談。

愛想笑いなんて元から上手じゃないけど、今はなんかもう頬が攣りそう。

「アキ、そろそろ出るぞ。打ち合わせ」

「この紅茶を飲み終えたら支度するよ」

「急げよ」

社長が去り際に、「水原、頼むな」とまた私の肩を叩いた。

それに頷き返し、私もそのまま自分のデスクを目指す。

「あ、瑠璃。ちよつと」

その呼び止めには全力で遠慮したかったけれど、そうもいかない。彼は私の上司だ。

無言で立ち止まり、渋々副社長のほうへ顔を向ける。

「しばらくの間は残業が続くそうだね」

「はい、恐らく」

「なにかあったら遠慮なく連絡して」

「……お気遣いありがとうございます」

「こちらこそ、紅茶ありがとうございます。お礼言ってなかったから」

「紅茶」という単語だけで、今の私は冷や汗がかかる。動悸も酷い。

「やっぱり瑠璃が淹れるとおいしいな。紅茶だけじゃなくて、なんでも。どうしてだろう」

「さ、さあ。特別なことはなにも」

お茶の淹れ方が上手いなんて、副社長以外に言われたことがない。

かなりの確率で気のせいだと思うが、必要以上の会話は控えたかったので、その言葉をぐくりと

呑み込んだ。

「手、なのか……」

「はい？」

副社長が小声でぼつりと言ったものだから、言葉の最後が聞こえず。

聞き返してみたけれど、彼は笑うだけでなにも答えなかった。

それから二週間の間、私は毎日残業をしてラフ画の制作を進めていくことになった。

イラスト込みの仕事は私にとつてわくわくと心躍るもので、飛ぶように時間が過ぎていく。

ただ今回のようにラフとしてイラストを描き提案しても、これがそのまま商品になるわけではない。使用するイラストを実際に描くのはイラストレーターの仕事。私の役目は、そのイラストをど

のようにレイアウトするのかを考えることである。

デザインとイラストは違う。

けれど、学生の頃、将来進む道をデザイナーと定めてからも、イラストの勉強もしておいて本当

によかったと思う。あの時間は、間違いなく今に活かしている。

絵を描くことは昔から好きだった。漫画を見よう見まねで描いていたこともある。

ただ、それは好きというだけで、イラストレーターや漫画家になれるほどの腕があるわけではない。なにより私はデザインの仕事をしなかった。だから学生時代の学びの比重は当然そちらに傾いた。

そんな私に助言をくれたのが——副社長だった。

様々なタッチで絵を描けることは、近い将来、必ずデザイナーとしての私の武器になると。

『だから今、時間のあるうちにしっかりとイラストのことも学んでおいたほうがいい。いろんなものを見て吸収して、引き出しを増やす努力をして』

そうやってアドバイスをもらって、デザインと並行してイラストについても学んだ結果、今の私がある。

彼の言葉は真実だった。

イラストが描けるということは、本当にデザイナーとしての私の武器になったのだ。

「うーわー……」

そこまで思考して、私は自分のデスクに項垂れた。

仕事をしながら、また副社長のことを考えている自分に気づいてしまったからだ。

——羽角さん、どういふつもりなんだろう。どうして、なんで。

付箋の送り主が羽角さんだとわかってから、彼のことを頭に思い浮かべる時間はますます長くなる一方だ。

どうしてこんなに頭から離れてくれないのか、自分でもよくわからない。

あの出来事で、彼に対する信頼にヒビが入った。

ただ不思議なことに尊敬の念は少しも薄れていない。

それから、あれ以来彼と顔を合わせると意識してしまい平常心を保つのが難しくなった。

彼はいつも通りだが、私だけが異常に意識しているのだ。

羽角さんは事務所内で唯一、落ち着いて話ができる相手だったのに。

ああ、羽角さんのことを考えていると集中が鈍る。集中力だけはあるはずなのに。残業ではあっても仕事中原のに。

はあー……と、重苦しいため息を吐き切った。

「……よし、がんばろ」

わざと声にして、もう少しで仕上がる目の前の仕事に集中しようと試みる。

なんとしても今日中に終わらせちゃおう。帰るのは諦めて、仮眠室で休めばいいや。他に締め切りがかぶってる人は誰もいないし、ベッドを使ってもいいよね。

多少気が散ったまま、結局ラフ画が仕上がったのは、終電の時間をとうに過ぎた午前一時半頃だった。

今回は達成感を覚えるよりも先に疲労がやってきた。

ずるずると足を引きずってシャワールームへ向かい、汗を流す。

それから肌の手入れをし、髪を乾かして仮眠室のベッドへ。

時刻は午前二時十五分。明りを常夜灯に絞り目を閉じる。

精神的にも肉体的にも疲れているのに、なかなか寝つけない。また漫画を読んで朝まで過ごそうか。そういえば昨日買った新刊を持ってきたんだっけ、とバッグに手を伸ばす。

すると、コンコン、とノックの音が響いた。

びくりと体が震えて鳥肌が立つ。そしてまた、ノックの音。  
今夜残業の申請をしていたのは私だけ。事務所には誰もいないはずだ。繰り返すが時刻は深夜二時過ぎ。

コンコン。また音が鳴る。

なにこのホラー。怖すぎてちょっと泣きそう。勘弁してよ、心霊現象!?

どうすることもできずに布団をかぶって固まっていると、ドアノブを引く音が聞こえてくる。

「やだつて！ やめてよ！ おぼけ的なの、ほんとに無理！ 無理です！」

半泣きで叫ぶ。と、聞こえてきたのは――

「おぼけじゃないよ。かわいいな」

という笑い混じりの、明るい声だった。

布団を剥がされる。本気で涙が滲んでいる目を少しだけ開いた。

常夜灯に照らされて微笑んでいたのは――羽角さんだった。

「こつ、これはこれでホラー……！」

「失礼だなあ」

飛び起きつつ思い切り本音が出してしまったが、言った言葉をなかつたことにはできないのでしようがない。

泣いていたことがばれるのが嫌で、慌てて目を擦った。

「おぼけだと思ったの？ 普通さ、まずは人間を疑わない？ 例えば泥棒とか」

そんなこと言われても、恐怖のノックに対して咄嗟に出てきた推測が心霊現象だったんだ。

「俺とか」

でも確かに、泥棒以外の――それも事務所内の人間で考えてみたら、今夜この鍵を持っているのは副社長だけだ。社長は海外へ出張に出ている。

そして他に残業を申請した者もない。

「かわいいね瑠璃は。本当にかわいい」

「や、めて下さい。かわいくなんてありませんから」

副社長の顔が、どんどん近づいてくる。

その表情が恍惚としているのが、常夜灯の下でもはっきりとわかる。

「こんな時間に、なんで」

「うん、最後は自分で渡そうと思って」

はい、と付箋を手渡され、心拍数が上昇する。

「これで最後」

言いながら、羽角さんがベッドへ上がってくる。ぎい、とスプリングが軋んだ。

上半身を起こしている私の太腿辺りを、彼の長い足が跨ぐ。少し開いていた私の足の間に腰を下ろして両膝を立てる。そして、自分の膝の上で頬杖をついた。

「読んで」

もう片方の手が、こちらに伸びてくる。



「読んでよ。それで、読み終わったときには、瑠璃の頭が俺でいっぱいになってるといいんだけど」

「……どういう意味ですか」

これを読まなくなつて、私の頭の中はすでに彼のことでいっぱいだ。でもそれがなんだか悔しい。だからはぐらかした。

「どういうって。俺の願望」

渡されたのは正方形の付箋だった。紙を裏返して、文字に目を走らせる。

『君は僕の光なんだ。君がいない世界は目の前すら見えない闇、心が死んでしまうよ』

「ふざけてない。本気だよ」

漆黒の髪が揺れる。綺麗な二重の線が、ありえないほど近くに見える。

「ねえ瑠璃。最初の付箋を届けてから今まで……俺のこと、意識してくれた？」

耳元で囁かれて、背筋が栗立つ。もう怖くはないのに、また涙が滲む。こんな羽角さんを私は知らない。

「どうしてこんなこと……」

「正攻法じゃ瑠璃には効かないでしょ。どうしたら俺のことを意識してくれるかなつて、考えた結果だよ」

吐息をたつぷりと含んだその声も、うっとりとした目つきも。私の知らない羽角さんが目の前にいる。

「俺はずっと瑠璃のことが好きだった。瑠璃が大学を卒業する頃から、ずーつとね。瑠璃の容姿も性格もデザイナーとしての才能も、すべてを愛してるよ。ずつと待ってたんだ」

羽角さんと知り合ったのは私が大学二年のときだ。ちょうど、長く付き合っていた幼馴染と別れた頃。

「ずつと、ですか。……ほ、本当に？」

「うん」

「待ってたって、なにを？」

「瑠璃がうちの事務所にくるのを」

「え……」

ぎゅっと、眉を顰めてしまう。

それは、彼が私に好意を持っていたから、この事務所に引き抜いてくれたということだろうか。私の実力を認めてくれたからではなく。血の気が引いていく。

「だから、私を引き抜いたんですか」

「だから？ ……ああ。まさか、冗談じゃない。瑠璃は自分の力を信じてないの？ 俺にしたって、私欲のため人を雇うなんてありえないよ。心外だな」

そんなこと鞠哉さんも絶対に許さない、と言う声は尖っている。

ほっと胸を撫で下ろした。

「いつもの……私の知っている副社長でしたら、そんなことをする方ではないと断言できるので

すが」

「うん。じゃあ、なんで？」

「この付箋を私に送ってくる方、は。スカートの内側に仕込みをするような人なので、信じられなくて」

呆気にとられたように副社長が瞬きをする。それから、くすりと笑った。

「どっちも俺だよ。待ってたっていうのは、瑠璃がうちの事務所に入るだけの実力をつけるのを待ってたってこと。瑠璃を捕まえるのは、そのときって決めてた。もし瑠璃が……、普通に告白して俺のことを好きになってくれるような子だったら、もっと早く言ってただろうね。でも多分、そうじゃないから瑠璃が好きなんだ」

それはわかるような、でもわからない理屈だ。

相も変わらずぐぐるぐると考え込んでいると、唇に柔らかいものが当たった。

「ん、う……っ」

副社長の唇はとても柔らかくて、吸いつくようなそれはまるで私を食べようとしているみたいだ。そしてべろりと、彼の舌が私の唇をなぞる。

キスから逃げようと顔を振っても、どこまでもついてくる。

「かわいい……」

唇をくっつけながら囁かれて、息が止まるかと思った。

混乱に揺れる手を取られて、ぎゅっと握られてしまう。

「好きだよ、瑠璃」

胸の奥が締めつけられる。

「あの付箋を見て俺のこと、意識したでしょう」

したよ。した。嫌になるくらい気になって、意識していた。

「言ってよ。俺のことで頭がいっぱいだって」

そうだよ。毎日毎日、羽角さんのことばかり。

「俺のことが好きだって言って」

気になって仕方なかった。

そのことに今さら腹が立つ。

私はなんて簡単に副社長の思惑通りに踊ってしまったんだろう。

「ああ、かわいい。……瑠璃は本当にまつげが長いよね。ずっと、ここに唇で触れてみたかった」

「ちよっ、やめてくださ……」

私の口元から離れた彼の唇が、今度はまつげへと移動する。

そして宣言通り、本当に唇でまつげに触れている。

目蓋を食まねがらまつげを揺らされるのも、時折零れる彼のセリフも、こう言ってはなんだがちよっ普通ではない感じがする。

そう思うのに、嫌悪を全く感じず頬を熱くして、心のどこかに痺れを覚えている私も一体なんなんだろう。

「あと、これも」

言いながら、掴まれていた指を広げられた。

右手の人差し指が、彼の口の中へ消えていく。

「え、ええつ。ちよつと！」

「ん……」

色っぽい声を漏らしながら、じゅつと口の中で吸う。

小さく顔を動かしながら、舌を指の腹に這わせてくる。

彼の口から指を引き抜こうとしたものの無駄だった。がっちり押さえられて動けない。

美しい瞳に諷められ、くすぐるように舌先で撫でられる。心どころか体中に痺れが走った。

「前に、ね。瑠璃が淹れる紅茶がおいしい理由、聞いたでしょ」

ちゅぽ、と羽角さんの口の中から指が戻ってくる。

「この指で、この手で。淹れるからだと思っただよね」

掌まで、れろと舐められて、頬が引き締まった。

——二週間前に紅茶を淹れたとき、聞き取れなかった言葉の続きはこうだったんだ。

「飲み物を入れてもらうたびに、この指を舐めたいなあっていつも思ってたんだ。あ……興奮する」

夢中になって私の手に口をつけている副社長を見て、眩暈がした。

付箋を貼る場所といい歯の浮くような文章といい、見え隠れしていた変態性が、目の前に顕在し

たのだ。

間違いない、この人、普通に変態だ。

私の神様、やっぱりまごうことなき変態だった。

「……っ、もうっ！」

甲高く叫びながら、力いっぱい手を引いてみる。

でも羽角さんの唇は私の手から離れてくれない。嬉しそうに微笑むだけだ。

「ひ、人として懂れてたの……！ 尊敬……は今も消えてないけど、でも人間性のほうはかなり

疑ってます！」

「尊敬してもらえるのも嬉しいけど、今はそれより、瑠璃に愛されたいなあ」

「詐欺っ、神様詐欺！」

「ははっ、詐欺か。騙したつもりないんだけどな」

なんでそんなに嬉しそうなんだろう。意味がわからない。

「瑠璃、口開けて。キスしよう」

指で顎を下げられて、唇が合わる。

口を開かない私を急かすように、副社長の舌が何度も唇を舐めた。

「ふっ……、も、う……っ」

言葉を紡ぐごとく開いた唇へ、乱暴に押し入ってきた彼の舌。それに、いいように翻弄される。

執拗に絡みついてくる彼の舌に口腔内を支配されてしまう。

——上司として完璧な羽角さんの、知られざる一面。

シヨックではあるけど、やっぱり全然嫌じゃない。

それどころか、目の前の羽角さんが気になって気になって、胸が高鳴って仕方ない。

この感情には覚えがある。避けていたけれど、いつか味わいたいと願っていた恋愛感情。彼の存在が気になって気になって、その結果惹かれてしまうなんて中学生みたいだ。自分がどうかしていると思えない。

「はっ、はあ……っ」

濃厚すぎるキスに息も絶え絶え酸欠状態に陥っていると、嬉々として腕を広げた彼に、その中へと閉じ込められる。

「ねえ、瑠璃。早く言つて。俺のことが好きだって」

「……っ、知らない」

つまり私は、付箋の送り主を気にしてしまった時点で、羽角さんの目論見通りに踊っていたわけだ。

恋を避けていた私に、あれ以上効果的に異性を意識させる方法があっただろうか。いや、多分ない。だからなおさら悔しい。

「でも、副社長のことが」

「それ、やめて言つて言つてるでしょ。せめていつも通り呼んでよ」

「羽角さんの、ことが……気になってしょうがない……」

しょうがないんだよ、ちくしょう。と心の中で毒を付け足した。

「本当に瑠璃は恋愛レベルが中学生辺りで止まってるんだね。俺のことが気になって、そのまま好きになってくれたんでしよう。ふふ、目論見通り」

やっと手に入れた、とこの世で一番の幸せを手に入れたみたいな顔をしている彼に、繰り返し頬を擦られる。

そのしつこさと言つたら尋常ではない。

「あ、あの、けど私……恋愛における自信がなくて、です……」

「自信？ そんなもの……あ……でも、瑠璃がどうしても欲しいっていうなら、俺があげるよ」

「え……」

「自信でしよう？ あげるよ。ただし、あげるのは俺と一生恋愛する自信に限るけどね。よそ見なんて絶対にさせない」

「よ、よそ見って、どこからそういう話に」

「愛してるよ、瑠璃。実はね、瑠璃の……いい好き少女漫画みたいな、ゆっくりと育む恋愛をするのもいいなとも思ってたんだけど、長年いろいろ我慢してるから限界なんだよね。とりあえず、体中舐めさせてくれる？ 余すところなく」

さて、どうしよう。やめるこの変態、と口にしてもいいものだろうか。

あと私が大の少女漫画好きだとなぜばれている。

「はー、瑠璃の髪いい匂い。さらに興奮する」

場所を移動したいんだけど、連れていっていい？ と耳元で囁かれ、体に痺れが走る。その言葉の意味がわからないほど子供じやない。経験がないわけでもない。

しかしどうにも急すぎる展開に頭が追いつかず、どぎまぎしながら首を捻った。

「おいで」

差し出された手を、じっと見つめる。

勝手に人の指を舐めて、息の止まるような強引なキスをするくせに。

こんなときだけ、私に決定権を差し出すなんてずるい。

「瑠璃」

そう思いながらも、おずおずと手を持ち上げている自分がいる。

すると、目の前の優しい微笑みが殊更深くなる。

馬鹿みたいに高鳴る鼓動に眩暈がした。

彼の指先に触れる。瞬間、ぐっと手を掴まれて体ごと掻き抱かれた。

その場で再度熱烈なキスを受けたのち、彼の車に乗せられて移動した先は——なんと羽角さんのマンションだった。

相当広いワンルームと、あまりにも生活感のない部屋の様子に面食らっていられたのはほんの短い時間だけ。

部屋に入った途端、私はまでも、性急で激しいキスに翻弄されることになった。

「ん、うう……っ」

頭がとろけてしまうような口づけを交わしつつ、部屋の奥に位置するベッドへともつれ込む。

シートに背をつけると、ふわりと優しい香りに包まれた。甘くて、少しスパイシーな香り。ぎゅうぎゅうに締めつけられている胸の奥が苦しい。

キスに惚けているうちにするすると服を脱がされ、素肌の上を彼の手が滑っていく。そしてそれを追いかけるように舌で体中を舐られる。

宣言通りの——しつこいほどの愛撫に、熱は上がっていく一方だ。

久しぶりすぎる感覚と味わったことのない快感に、あられもない声を上げて身を振った。

「瑠璃……かわいいい」

甘い声で囁かれ幸福の眼差しを向けられると、体も心も酷く反応してしまう。

無意識のうちに伸ばして空を切った手を掴まれ、愛おしげに握られる。

——神様みたいだと思っていた人。いつだって尊敬する仕事を見せてくれる人。

けれど今、目の前にいる羽角さんは、手を繋いで肌を合わせている彼は、はるか遠い雲の上の存在じゃない。それを強く実感している。

これは私の思考回路がネガティブであるせいなのかかもしれないが、今考えると、羽角さんが私のイメージからは逸脱した人である——スカートの内側に仕込みをするような人だとわかったからこそ、彼も私と同じ人間なんだ、と一人の男性として初めて意識したのだと思う。

だってそれまで羽角さんは神様だったから。

神様に恋慕の情を抱くなんて、例えば私が恋愛を避けない人生を歩んでいったってありえない。

彼は神様じゃない。羽角さんにだって不完全な部分があるのだと知ったからこそ、加速度的に気になって気になって、惹かれてしまった。彼の付箋攻撃は素直に気味が悪かったけれども、恋愛を避けていた私にも、ネガティブな私にもやっぱりちよっどよかったのだろう。

「あ、あっ……、んん……！」

秘所をぐちよぐちよと掻き回されて、もう何度目かわからない高みに昇る。もういいと言うほど長い時間、愛撫が続く。

からからに渴いた喉から、なんとか声を絞り出した。

「も、う……、いい、です……っ！」

私の言葉を彼は至極嬉しそうに受け止め、膝を割り熱い昂ぶりで膣口を揺らした。

びしょびしょに濡れているそこに、昂ぶりがゆっくりと進入してくる。

彼に揺らされながら、気の遠くなるような甘美な官能の中で、私は咽び泣いて喘いだ。

——もし、恋をすることで動く時計があるとしたら。

私の時計の針は一体いつから動き始めていたのだろうか。

それから、事の顛末を美咲に報告しなくちゃ。

付箋の犯人、羽角さんだったよって。私の神様変態だったよって。

そしてその人相手に私の恋の時計が動き始めたと言ったら、彼女はどんな反応をするかな。

6

俺——羽角晶斗と鞠哉さんが共同で経営する事務所への瑠璃の入社が決まっすぐ。

俺はやっと、三十二歳になった。でもまだ三十二か、とも思う。

家柄のせいとか、子供の頃は自由にできることが少なくて、だからずっと早く大人になりたいと願っていた。そうすればどんなことでも自分で選択できるようになると思っていたのだ。

子供の頃は、とりあえず二十歳を目標に生きていた。

成人は大人の証だと考えていたからだ。

けれど、成人なんてのはただのカテゴリーだと実際に二十歳になって知った。それに気づいたときは愕然とした。

待ち焦がれていた年齢になったはずなのに、選択肢はまるで増えない。

好きなことなんてひとつも選べなかった。

二十歳になってすぐ窮屈な家を飛び出して、やりたいように、自分の好きなことを追い求めて生きてきた。

でも結局、煩わしい問題はその後もしばらく消えなかったし、子供の頃に思い描いていた“大人”に自分は今も遠く及ばず。